

香取遺産

vol.178 学びの場と筆子塚


 ▲堀越小兵衛の筆子塚

江戸時代、現在のような公立の学校はなく、寺に設けられた寺子屋や塾が当時の子どもたちの学びの場で、著名なものとしては、久保木竹窓の家塾である、息耕堂が挙げられます。また、そこで学ぶ者は筆子と呼ばれ、読み書きやそろばんなどを学びました。そして彼らが成長した頃、教えを受けた師が亡くなると、皆で費用を出し合つて筆子塚と呼ばれる供養塔を造り、師の経歴や人徳を刻み込んで感謝の印としました。市内では、約280基の筆子塚が確認できます。これらは、単なる供養塔ではなく、寺子屋や塾が設けられていたことを知る手掛かりとなります。

岩部の安興寺や大乘寺には、江戸時代の中頃から明治時代にかけての筆子塚が合わせて7基あります。銘文には西田部や助沢だけでなく、多古町喜多などの筆子が確認でき、さまざまな地域から子どもたちが集まり、学んでいたことがうかがえます。

北総地域では、幕末以降になると寺子屋や塾が急激に普及し始め、一部の古刹だけでなく、広い範囲で見られるようになり、岩部に隣接する高萩、助沢、荒北でも筆子塚を確認できます。

荒北の浄伝寺には堀越小兵衛の筆子塚があります。彼が亡くなった8年後の明治25年に子弟らによって造られ、懇切善良な性格で、学問を好み、近隣に推挙され家塾を開き、子弟たちに学問を教え導いたと刻まれています。地元の要請で塾を開いたことが読み取れる数少ない事例で、小兵衛の人徳の良さや当時の子弟教育に対する需要の高まりが伝わってきます。現在でもこの筆子塚には花が手向けられており、地元で大切にされています。